



# わかくさ

吉田小HP  
ぜひご覧ください今月のいじめ認知件数は次号でお知らせします。  
いじめに関する情報は学校まで

## 2026年がスタート！ 今年もよろしくお願ひいたします！ ~3学期始業式~

新しい一年が始まり、今年度も3学期を残すのみとなりました。これまで積み重ねてきた学びや身に付いた力を更にパワーアップできるよう、教職員一同尽力して参ります。本年もどうぞよろしくお願ひいたします。

今日の始業式で、子どもたちに植松 <sup>つじまつ</sup> 努さんの「思いは招く」というお話をしました。植松さんがTED（様々な分野の専門家による講演会を主催しているNPO団体）でスピーチしたものです。自身の経験をもとに、夢を諦めずに挑戦し続けることの大切さを、今も全国各地で伝えられています。植松さんはドラマ「下町ロケット」のモデルになったとも言われています。植松さんのTEDのスピーチはYouTubeで視聴することができます。

### 「思いは招く」

植松さんは北海道赤平市で生まれました。植松電機というリサイクル用のマグネットを造る会社の社長をしながら、自分の夢だった民間ロケットの打ち上げに挑戦したり、全国の子どもたちのためにロケット教室を開催したりしています。また、講演を通して夢を諦めないことの大切さを伝えています。

小さい頃、おばあさんから「お金の値打ちは変わるけれど、勉強して身に付けたことは誰にも取られず、新しいことを生み出す力になる」と教えられ、本を読むのが大好きな子どもになりました。また、おじいさんと一緒にテレビで見たアポロの月面着陸に感動したことがきっかけで、飛行機やロケットに強い憧れを持つようになりました。

しかし、中学生になると、先生から「宇宙のことは、とても頭のいい特別な人にしかできない」「そんな夢、お前にはどうせ無理だ」と言われ、とても悲しい気持ちになります。植松さんは「夢ってなんだろう。今はできないことに挑戦するのが本当の夢なんじゃないか」と思うようになったのです。

世の中には、「安定した仕事が一番」「楽をしてお金をかせぐのがいい」と考える大人も多くいます。でも植松さんは、お金よりも「できることを増やすこと」の方が大切で、それが人の役に立ち、社会を良くする力になると考えました。

自分の好きなことを続ける中で、周りから理解されず、ひとりぼっちになったこともありました。エジソンやライト兄弟など、本で読んだ偉い人たちに勇気をもらつてものづくりを続け、会社をつくることができました。しかし、その後、大きな失敗をして人を信じられなくなったこともあったそうです。そんなとき、人との出会いやボランティアを通して、「どうせ無理」という言葉が、人の自信や夢を奪ってしまうことに気付きました。

植松さんは「どうせ無理」をなくすために、誰もが無理だと思っていた宇宙開発に挑戦します。ロケットを研究する先生と出会い、お互いに足りないところを助け合うことで、とうとうロケットづくりを実現させたのです。

植松さんは、「人は完璧じゃないからこそ助け合える」「失敗は悪いことではなく、挑戦することに意味があり、成長するための大切な経験だ」と話しています。そして、誰かの夢を聞いたときに「どうせ無理」と言うのではなく、「だったらこうしてみたら？」と元気が湧くような声を掛け合える世界をつくろうと呼び掛けます。

植松さんは、お母さんから教えてもらった「思うは招く」（思い続ければ、叶えたいことは近づいてくる）という言葉を大切にしてきました。「思い続け、挑戦し続けることで、誰もが自分の可能性を信じられる未来をつくることができる」と伝え続けています。

